

学 界 展 望

● 哲 学

はじめに

「学界展望」哲学部門は昨年度に引き続き福岡教育大学の鶴成久章がとりまとめ役を務め、各分野を牽引する気鋭の会員に原稿を依頼した。依頼に際して、執筆方針は昨年度と同様、2024年に日本国内で刊行された単行本を中心に、中国哲学・思想に関わりのある論著（訳書を含む）につき、論評よりも紹介に重点を置き、なるべく多くの情報を提示するようお願いした。

各分野の執筆者は、次のとおりである。

- はじめに・総記： 鶴成久章（福岡教育大学）
- 古代（先秦～漢）： 工藤卓司（県立広島大学）
- 中世（三国～唐）： 池田恭哉（京都大学）
- 近世（宋・元）： 藤井倫明（九州大学）
- 近世（明・清）： 尾崎順一郎（立命館大学）
- 近代： 竹元規人（福岡教育大学）
- 道教・仏教・民間信仰： 齋藤智寛（東北大学）
- 日本・朝鮮漢学など： 高田宗平（平成国際大学）

寄せられた原稿は鶴成がとりまとめたのち、出版委員会での検討をへて全体を調整した。

一、総記

中国哲学・思想に関連する項目を多数収録した事典として、川合康三・大谷雅夫・黒田真美子・小島毅・後藤昭雄編『中国／日本〈漢〉文化大事典』（明治書院）が刊行された。全952頁の鉅冊ながら、項目数は中国編が252項目、日本編が174項目に精選されているため、各項目の記述が詳細であり「読む事典」としての価値も高い。なお、「人名索引」「書名索引」「事項索引」は収録されておらず、同社のホームページでpdf版が別途公開されている。

中国哲学・思想関連の研究論文を掲載する総合的な論文集としては、二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢学研究センター編『孔子二千五百年記念「儒教祭祀の歴史を考える」』（長久出版社）がある。2022年に開催されたシンポジウムの報告書で、孔子を祀る釈奠の儀式から近世日本の漢学者の祭祀に至るまで、東アジアにおける儒教祭祀の歴史を多角的に論じた論考を収録する。外村中・稲本泰生編『「見える」ものや「見えない」ものをあらわす 東アジアの思想・文物・藝術』（勉誠社）は、宗教・思想をはじめ、考古遺物から彫刻絵画、建築庭園、芸能音楽等にまで及ぶ様々な論点を、研究者24名の視点により提示する論集。中国哲学・思想関係では、古勝隆一「后稷は天

に配せられたのか—『詩』大雅「生民」から『孝経』へ」、横手裕「医家と道家と体内観」、福谷彬「道学における周敦頤顕彰と『太極図説』への注目」などが収録されている。

一方、単著としては、東アジア地域を対象とする「死生学」の研究を牽引してきた池澤優氏の『東アジアの死生学・応用倫理へ』（東方書店）、および『古代中国の“死者性”の転倒—戦国秦漢期における死生観の変遷』（汲古書院）が刊行された。前者は、第Ⅰ部「中国の医療倫理・生命倫理」、第Ⅱ部「台湾の生死学」の二部構成で、東アジアにおける死生学・応用倫理という領域を開拓してきた著者の先駆的な論文を収録している。後者については、「古代」の部分で取りあげる。

書に関わる研究書としては、仲村康太郎・成田健太郎校訂・訳注『毘沙門堂蔵 篆隸文体』（臨川書店）がある。多数の意匠化された装飾文字を記録した書体の見本帳とされる南齊・蕭子良撰『篆隸文体』の唯一の伝本である京都山科の毘沙門堂蔵写本全紙の影印をフルカラーで掲載し、翻刻・訳注を付す。西原一幸『楷書の秘密 「字様」が発見されるまで』（勉誠社）は、著者が発見した典籍『正名要録』『群書新定字様』の精査から浮かんでくる「字様」という概念を紹介し、さらに『説文解字』の検討により楷書の歴史を整理し、「楷書」という東アジア漢字文化圏を支える文字体系の解明を目指す。松村茂樹『書の語られ方 中国篇 書論通観1』（日本経済評論社）は、書法・書道を論じた文章を十項目に分類し、書き下し文と解説を付す。『墨』（芸術新聞社）の連載「書論通観」を再編集したもの。

儒教道徳や政治思想の研究にも関連が深いと思われる法律・裁判、行政記録に関わる研究書や訳注が複数刊行された。水間大輔『中国隋唐律十惡起源考』（成文堂）は、隋唐期以降の「律」に設けられていた特に悪質な十種類の犯罪「十惡」の各罪目がいつ頃、いかなる変遷をへて形成されたのか、またその時代の社会においていかなる意味を持っていたのかを明らかにする。大澤正昭監修、佐々木愛責任編集、石川重雄・戸田裕司・小島浩之編、清明集研究会訳注『訳注『名公書判清明集』懲惡門』（汲古書院）は、明版『名公書判清明集』「懲惡門」の原文に和訳と注をつけ、解説（「南宋時代の法と裁判—『清明集』を読むために—」）、関連地図、南宋時代の司法行政系統図、引用・参照文献一覧、判語作者一覧、および索引を付す。同研究会が1991年から1995年に刊行した「訳注稿」に改訂増補を加えたもの。佐立治人『吳訥撰・若山拯訓読『祥刑要覧』の訳注—旧中国の裁判の教訓と逸話—』（関西大学出版部）は、明の都察院左副都御史を務めた吳訥が経書、思想家の著作、および歴史書の中から裁判の教訓となる文章を抜き出して編集した『祥刑要覧』の訳注書。喜多三佳『天台治略訳注』（汲古書院）は、清の康熙年間に浙江省天台県の知県を務めた戴兆佳の手になる行政記録『天台治略』の訳注書。内容は、「詳文」（上司への報告書・申請書）、「讞語」（裁判記録）、「告示」（県民や下役への告示）、「啓」（公的書簡）ほか、多岐にわたっている。

個人の全集・著作集としては、2002年に刊行が始まった『岡田武彦全集』全25冊（明德出版社）が完結した。最終巻『楠本端山』は、1959年に積文館書店から刊行された『楠本端山：生涯と思想』に、著書自身の追加補足原稿を加え、編者によって原漢文

に訓読文、難語に注を付す等の編集が施されている。『山田慶児著作集』（臨川書店）は、第7巻「科学論（近代篇）／欧文」が刊行された。同巻には、1968年に筑摩書房から刊行された『未来への問い—中国の試み』に掲載された論文をはじめ、現代中国を研究対象とした初期の論考、並びに欧文で発表された5本の論文を収録している。さらに、2018年に刊行が始まった『田中淡著作集』全3巻（中央公論美術出版）が『中国建築と日本』の刊行により完結した。その他、個人の全集・著作集ではないが、明治・大正時代に活躍した漢学者・ジャーナリスト西村天囚の没後100年を記念してその全容に迫ろうとする「西村天囚研究」（全6巻）の第1巻として湯浅邦弘『近代人文学の形成 西村天囚の生涯と業績』（汲古書院）が刊行された。

復刊・改訂版の出版としては、中国三千年の思想を、民族の社会・生活に根差した「総合的な知」として捉え直そうとした思想通史である村山吉廣『中国の思想』（現代教養文庫、社会思想社、1972年）が、ちくま学芸文庫として復刊された。解説は湯浅邦弘氏が執筆している。（鶴成久章）

二、古代（先秦～漢代）

2024年、日本における先秦兩漢の哲学・思想に関する出版は、前年に比してやや状況を呈した。

まず、2024年6月に逝去された池澤優氏の『古代中国の“死者性”の転倒—戦国秦漢期における死生観の変遷』（汲古書院）は、古代（殷・周・春秋）的なものから中世（六朝・隋・唐）的なものへと移行する転換期としての戦国秦漢時代の死生観並びに死者観の変遷について、「死者性」という概念をキーワードとしながら、主として随葬すること自体が儀礼的意味を持つか、死者儀礼に関連すると考えられる出土資料を用いて迫る。そして、「古代的な祖先崇拝から中世的な死者供養へ」という死者への対応の変化を明らかにし、その背後に現実の生を取り巻く状況の変化を見ようとしている。

次に高戸聰『中国神話における神々と巫—天と人との媒介として』（汲古書院）が挙げられる。第一部は中国古代の神話構造について、「天の至上神」「地上の人々」とその両者を媒介する「神」との三極構造になっていたものが、漢代の天人相関・災異思想のもとでは「神」が介在する余地を失ったと論じ、第二部では、その「神」に代わって介在者としての位置を占めた「巫」の特徴を論じて、その神秘体験の背後に「狂」が潜在することを明らかにしている。

森川亨『孔子の実像と『論語』の編纂過程』（皓星社）は、第一部で顔淵との関係を主として最晩年の孔子に焦点を当てて論じ、第二部では『論語』の編纂について、編纂者の動機面から考察を加えている。

続いて、世界情勢に触発されてか、軍事思想に関わる著作として梶島雅弘『術数からみた中国兵学思想史研究』（朋友書店）と渡邊義浩編『中国古代における軍事と国家統治』（汲古書院）が出版されている。前者は「術数」と兵陰陽や『孫子』との関わり、各占術の占法・理とその変遷について論じ、古代中国の兵学思想に迫る。後者は2023年5月に開催された第四回「中国文化研究国際論壇」の成果であるが、黄朴民「古司

馬法」と先秦「軍礼」の関係探微」、湯浅邦弘「王権の由来と軍事の正当性—清華簡『五紀』『参不韋』考釈—」、渡邊義浩「中国古代における軍事思想の展開と儒教」、郭慧瓊「『府君教碑』に現れた後漢の地方統治理念」等が収載されている。なお、渡邊著としては外に『韓非子入門』（ミネルヴァ書房）と『「中国」は、いかにして統一されたか—始皇帝の六国平定』（NHK 出版）も出ている。

ところで、2024 年には『鬼谷子』に関する研究書が二冊出版された。まず、向井哲夫『『鬼谷子』等中国古代文献研究』（清風堂書店）である。特に第一部では、一般に偽書とされる『鬼谷子』を他書と比較することで、その信頼性を証明し、縦横家思想の体系的研究の基礎の構築に挑んでいる。また、高橋健太郎『鬼谷子全訳注—中国最古の「策謀」指南書』（草思社）は、2016 年の前著『鬼谷子—中国史上最強の策謀術』（草思社文庫、2020 年）に続く成果となっている。

その他、2024 年は翻訳の分野で豊富な成果を得た。まず、末永高康訳注『孝経・曾子』（岩波文庫）が上梓された。武内義雄・坂本良太郎訳注の旧版は 1940 年の出版に係るから、84 年ぶりの新版ということになる。底本や旧版の附録「曾子集語」が割愛されているといった点で相違がある他、新版では書き下し文に加えて丁寧な語釈と平易な日本語訳が付されており、一読すべき好訳と言える。次に、柿沼陽平編訳注『岳麓書院藏秦簡「為獄等状四種」訳注—裁判記録からみる戦国末期の秦』（平凡社東洋文庫）も、当時の人々の日常生活を窺い知る上で貴重な成果である。柿沼氏は孫機『中国古代物質文化』（中華書局、2014 年）を邦訳した『モノからみた中国古代文化—衣食住行から科学芸術まで』（東方書店）も出版している。また、近藤則之『全訳 春秋繁露』（明德出版社）がある。『春秋繁露』については日原利国『春秋繁露』（明德出版社、1977 年）や坂本具償・財木美樹両氏による訳注があるのみだったが、本訳注は蘇輿『春秋繁露義証』をもとに劉師培『春秋繁露輯補』等を参考に全訳を試みたもので、訳者長年の研究成果である。明治書院からは楠山春樹『呂氏春秋』下巻及び谷中信一『晏子春秋』が出ており、東方書店からは 2000 年に出版された福井重雅編『訳注 西京雜記・独断』も新装版が出版されている。渡邊義浩訳『後漢書 志〔二〕』『同 列伝〔一〕』『同〔二〕』（早稲田大学出版部）も重要な成果だと言えよう。その他の翻訳書としては、李亮『燦爛星河—中国古代星図』（2021 年）を邦訳した『中国古星図』（科学出版社、望月暢子訳）や、マイケル・シューマンの *Confucius: And the World He Created*（2015 年）の邦訳版『孔子復活—東アジアの経済成長と儒教』（日経 BP、漆嶋稔訳）を挙げておきたい。

歴史分野では、松丸道雄『殷周史甲骨金文研究』（大修館書店）、落合淳思『部首の誕生—漢字がうつす古代中国』（角川書店）、上野祥史・下田誠編『秦帝国と封泥—社会を支えた伝送システム』（六一書房）、福永善隆『前漢官僚機構の構造と展開』（汲古書院）、阿部幸信『印綬が創った天下秩序—漢王朝の統治と世界観』（山川出版社）、佐藤信弥『古代中国王朝史の誕生—歴史はどう記述されてきたか』（筑摩書房）等が出ている。特に佐藤著は、西周から春秋時代にかけての歴史認識や神話について明らかにした後、『春秋』『左伝』『竹書紀年』等の歴史書や諸子百家における歴史観を検討し、『史記』の

編纂とその背景を論じており、思想研究者にとっても有益な情報を提供するものであろう。

最後に、近年は往年の名著が多く再刊されているが、2024 年も同様の傾向が見られた。浅野裕一『図解 諸子百家の思想』（角川書店）は『図解雑学 諸子百家』（ナツメ社、2007 年）の増補改訂版である。また、もと「書物誕生」シリーズ（岩波書店）の 1 冊だった平田昌司『『孫子』一解答のない兵法』（2009 年）も『『孫子』の読書史―「解答のない兵法」の魅力』として講談社学術文庫に収められている。（工藤卓司）

三、中世（三国～唐）

中世分野について、本年は哲学・思想分野における書籍刊行が少なかった。そこで以下、文学や歴史学をも含めた形で紹介していくことになる。

まず訳注になるが、渡邊義浩・伊藤涼編『全譯王弼註老子』（汲古書院）が刊行となった。数多くの注釈が存在する文献を翻訳する場合、大きく分けて二つの行き方がある。第一は多くの注釈の中から自らの是とするものを適宜注選択し、それに従って翻訳する。第二は依拠する注釈を一種類に決め、ひたすらそれに準拠して翻訳する。概して第一の行き方が採用されるが、この渡邊・伊藤両氏の訳注は第二の行き方を採用し、『老子』本文を王弼注に依拠して翻訳し、そして何より王弼注そのものの、さらには『老子指略』に対しても、訓読と現代語訳を与える。詳細な補注も有意義で、今後の玄学研究における大きな土台となろう。なお訳注としては、連載の『藝文類聚（巻五二） 訓讀付索引』（大東文化大学東洋研究所）も公表された。

文学の方面に目を向けると、釜谷武志『歌と語りの文学史―兩漢文学考』（研文出版）では、例えば第一部・第五章「漢魏晋の文学に見られる華と夷」が、当時の文学作品の中に観念的に描き出された華夷意識について分析する。第三部・第四章「漢代文学と讖緯思想」では、文学作品における讖緯思想の影響を考察し、その神秘性が文学創作に与える力について可能性を提示する。第三部・第五章「先秦から六朝にかけての罪と罰」は、文学作品に見える罪の意識の時代的な変遷をたどり、その意義を考える。いずれも漢代を含みつつ、文学研究を軸足とするが、思想史研究の観点からも大いに参照に値する。福井佳夫『梁の蕭兄弟―昭明太子・簡文帝・元帝―』（汲古書院）は、梁の武帝・蕭衍の三人の皇子たちを、評伝のスタイルで紹介する。だがそれは単なる伝記には終始せず、皇子として梁という時代と対峙する彼らの精神に肉薄して、一つの精神史となっている。紺野達也『王維『輞川集』の研究―詩歌・園林・繪畫の融合―』（研文出版）は、I で『輞川集』を中心にその詩歌と園林風景の関係を分析した先に、II・III で王維以後の文人によるその評価を問題とする。そこでは特に園林、詩歌に絵画という営みや、時には仏教を加えて考察の対象とし、唐宋から明清における『輞川集』の位置を定めようとする。それは一つの文化史といった様相を呈する。

『〈中国の詩学〉を超えて』（研文出版）は、2022 年に出版された川合康三『中国の詩学』（研文出版）による啓発を受けて、川合氏の受業生を中心とする文学・哲学分野の研究者が各々の問題意識を発展させた形の論文集である。宋吟「建安詩における自然描

写の変容と作者の個一王粲・劉楨を中心に」、池田恭哉「顔之推と典故—「觀我生賦」を中心に」、乾源俊「道の探求—李白「素畜道義」考」など、中世の哲学・思想とも関わる論考が複数備わる。

歴史学分野に関連しては、関尾史郎『塼画墓・壁画墓と河西地域社会』（汲古書院）がある。本書が取り上げるのは、中国の甘肅省西部たる河西地域において、魏晉・五胡十六国時代に築造された塼画墓・壁画墓であり、関尾氏がすでに整理し公表済みのデータに基づきつつ、その中身をより具体的に考察する。特に思想や宗教という側面からは、第三章「天上と地下—河西発現、魏晉・〈五胡〉墓の冥界観」が興味深い。また羅新『果てしない余生—ある北魏宮女とその時代』（田中一輝訳、人文書院）は、羅氏の『漫長的余生—一個北魏宮女和她的時代』（北京日報出版社、2022年）の邦訳書で、墓誌を材料として北魏の後宮とそこに生きた女性の声に耳を傾け、思想史の面でも新たな研究手法の可能性を感じさせるに十分である。

過去の名著の復刊も相次いだ。法蔵館文庫からは、渡辺信一郎『増補 天空の玉座 中国古代帝国の朝政と儀礼』および礪波護『馮道 乱世の宰相』が出て、いずれも関連する補篇が複数附されており、旧版より充実度を増す。また講談社学術文庫からは、吉川忠夫『竹林の七賢』および興膳宏『陶淵明』が出た。礪波、吉川、興膳の三氏の著作は、筆者が研究者の道を志した段階ですでに入手が困難を極め、古書店で探し回った記憶が蘇る。渡辺氏の著作を含め、それらが文庫版で容易に入手可能となったことを喜ぶとともに、これらを基礎としながら、後の世代が新たな研究を世に問うべく、より一層奮起しなくてはならないとの思いを新たにさせられる。

（池田恭哉）

四、近世（宋・元）

2024年には、北宋の思想を扱った専著が二点刊行された。一つは山際明利『張載思想研究 宋明理學の中の「太虚」説』（北海道大学出版会）、もう一つは陳佑真『三蘇蜀学の研究—北宋士大夫による儒家經典解釈の展開』（京都大学学術出版会）である。山際『張載思想研究』は、張載の生涯・事績・著作から思想内容や後世への影響に至るまで、張載及び関学に関わる諸問題を総体的に取り上げており、基礎的な知識から専門的な課題に至るまでをバランス良く理解することができる構成となっている。本書において特に注目すべきは、張載の遺著を「経伝に対する注解」として位置付ける視点、および張載思想の重心を「氣」ではなく「虚」に置き、「虚への志向」にこそ朱子学に吸収されなかった張載思想の「真面目」、すなわち独自性があると見なしている点である。そして、著者が謳うように、本書は張載の人物と思想に「全体的考察」を加えた「史上初の日本語による専著」であり、日本における張載研究の基礎を提供したという点でも、貴重な著作であろう。なお、著者は、「今後の課題」として「新学、蜀学と関学との関係に関する調査」の必要性を指摘しているが、その「蜀学」を研究対象としたのが、まさに陳佑真『三蘇蜀学の研究』である。

本書は「三蘇」、すなわち蘇洵およびその二子である蘇軾・蘇轍による経学関連の著作に注目し、彼らが儒家經典をどのように受容し、またどのように解釈していたのかに

ついて、実証的な分析を通じて三蘇蜀学の思想的特質の解明を試みている。具体的には、『周易』『尚書』『論語』『孟子』をめぐる三蘇の言説や解釈が取り上げられているが、とりわけ注目されるのは、第四章および第五章において展開されている『孟子』評価に関する分析である。本書は、従来広く流布していた、三蘇を『孟子』に批判的な「非孟派」とする見解を覆し、彼らが性説以外の点においては、『孟子』を文学的にも思想的にも高く評価する「尊孟」の立場にあったことを明らかにしている。従来、蘇軾をはじめとする三蘇蜀学研究は文学方面に偏重し、思想方面の分析は手薄であった。また、蜀学を経学史の流れの中に位置づけ、その思想的特質を検討するという試みも十分にはなされてこなかった。その意味で、本書は斬新であり、従来の蜀学研究の不備を補うもの言えよう。なお『張載思想研究』および『三蘇蜀学の研究』のいずれも、博士学位申請論文に加筆修正を施したものである。

『中国／日本〈漢〉文化大事典』（明治書院）の「中国編」では、宋代思想に関連して、范仲淹、王安石、蘇軾、朱熹、朱子学、内丹、王応麟などが、また金・元代思想に関連しては、呉澄、全真教が項目として立てられ、それぞれに解説が加えられている。人物については、その生涯から思想的特質、歴史的評価にいたるまで詳細に記述されており、有益である。なかでも「朱子学」の項（市來津由彦執筆）では、朱子学成立に至る歴史的・時代的背景、朱熹の思想・学説の内容から朱子学の歴史的・地域的展開に至るまで、7頁にわたり丁寧な解説が施されている。

朱子学との関係で注目されるのが、川原秀城『朝鮮朱子学 退溪心学と栗谷道学』（東京大学出版会）である。本書は、「朝鮮朱子学の成立の経緯とその思想内容について、時間の流れに沿って論説したもの」（「前言」）であり、本学界展望では「日本・朝鮮漢学など」の分野に位置付けられる成果であるが、朱熹の思想および中国において展開した朱子学の特質を理解する上でも、朝鮮朱子学の存在を看過することはできない。朝鮮朱子学の研究はこれまで、李滉（退溪）に焦点が当てられる傾向が強かったが、本書では李珥（栗谷）の思想・学説にも詳細な分析が加えられており、学術的に貴重な貢献をなしている。

山本正身『江戸教育思想』（ミネルヴァ書房）は、「江戸時代の教育思想の構造と展開を通史的に描き出」したものであるが、その第二章「朱子学の教育思想」では、朱子学における理気論・人間観・修養論が、教育思想の文脈から論じられており、興味深い。とくに本書では、朱子学的な「教」の方法として、間接的な「開発」「感化」「啓発」や「自得」、「因材施教」などが指摘されている。

また、中国思想の枠を超えるが、重田みち『風姿花伝研究』（臨川書店）も注目に値する。本書は世阿弥の能楽論に関する研究であるが、第16章「世阿弥の能楽論における朱子学の影響」において、世阿弥が朱子学を学び、その能楽論に朱子学的な身心観や格物窮理論の影響が見られることを明らかにしている。本書は、史上初めて朱子学と世阿弥能楽論との関係に注目し、分析を加えた点において、学術的にも貴重である。

（藤井倫明）

五、近世（明・清）

明清思想に関する著作は昨年に比べて大幅に減少した。ここでは一書の中で明清思想に関連する叙述があるものや思想研究にも裨益する歴史分野の著書についても取り上げる。

李麗『渡来人陳元賛の思想と生涯—江戸期日本の老子研究—』（知泉書館）は第二部「陳元賛の思想—林希逸『老子虞齋口義』の批判を中心に」で、陳元賛が渡日後に編纂した『老子経通考』を取り上げ、本書の編纂・出版状況に関する考察や本書と焦竑『老子翼』における諸家の説の引用方法の関連といった文献学的な考察を行った上で、陳元賛の林希逸『老子虞齋口義』への批判とともに有無観、「天心聖心一致」論、実学思想を明らかにし、林希逸批判の背景には林羅山への批判があったとの見通しも示している。附章の「陳元賛の書簡」では、内閣文庫蔵『陳元賛書翰』、瑞光寺蔵『陳元賛書牘（開山宛廿四通）』、瑞光寺蔵『芝山尺牘』の解題・翻刻を行い、資料面での充実化を図っている。

菅野智明『中国書学の近代知』（汲古書院）の第一部「前近代からの接続」では、清代乾嘉期の翁方綱と阮元の書法史論を主要な考察対象とする。「翁方綱にみる名品の書流—『化度寺碑考』を手がかりとして—」は、翁方綱『化度寺碑考』（京大人文研所蔵本）中の「化度寺碑銘筆法攷」の翻刻と分析を行い、翁方綱には珍しく書体史・書法史の観点から欧陽詢『化度寺碑』の価値を論じている点に本書の特色を見出す。「翁方綱の北碑観—兼ねて阮元説との関係に及ぶ—」は、翁方綱の北碑に対する評価が唐楷への絶対視を前提とするものであり、阮元の北碑重視とは性質が異なることを指摘し、旧来の北碑に対する全否定説や強調説に見直しを迫る。「翁方綱・阮元と清朝書学の転換—「帖学期」・「碑学期」を超えて—」は、清代における書学の展開を「帖学期」や「碑学期」という書作の潮流とは区別した上で、清朝書学の変遷の中に翁方綱と阮元の対比的な書法史論を位置づける。

夫馬進『訟師の中国史 国家の鬼子と健訟』（筑摩書房）は、宋代以降の中国が、頻繁に訴訟が行われた「健訟社会」であったことを指摘し、近代以前において民間で人々の訴訟を請け負った「訟師」がどのような存在であったのか、訴訟制度や訴訟の事例などを織り交ぜながら解き明かしていく。山本英史『清代知識人が語る官僚人生』（東方書店）は、『福惠全書』の著者である黄六鴻をナレーター役に起用し、清代の知識人が科挙を経て知県として着任するまでの過程から任地での生活や業務、人間関係そして離任に至るまでを描写する。いずれも当時の中国社会を理解する上で示唆に富むものであり、前者には高見澤磨氏（『中国研究月報』78-12）、後者には岸本美緒氏（WEB『東方』、2024年11月15日）、両書に対して岡本隆司氏（読売新聞オンライン、2024年8月2日）の書評がある。なお、「総記」で取り上げているが、佐立治人訳注『呉訥撰・若山拯訓説『祥刑要覧』の訳注—旧中国の裁判の教訓と逸話—』（関西大学出版部）や喜多三佳訳注『天台治略訳注』（汲古書院）なども出版されている。

伊香賀隆『聶双江』（「シリーズ陽明学」7、明德出版社）は、いわゆる江右王門の聶

豹の代表的著作『困弁録』や陽明門下の高弟たちへ宛てた書簡などの訳注であり、聶豹の帰寂思想を垣間見ることができる。

野間文史氏は翻刻・解題『平賀中南『春秋集箋』』（研文出版、2017年）に続いて、『顧炎武と平賀中南の春秋学』（明德出版社）を上梓した。本書には顧炎武『日知録』巻4（春秋篇）全篇および平賀中南『春秋稽古』巻35「経伝総論」、巻70「左伝禦侮」の「総論」、巻76「公穀胡斥妄」の冒頭部分の訓注を収録する。

荒木見悟『仏教と陽明学』（第三文明社、1979年）が「法蔵館文庫」として復刊された。「解説」を担当した三浦秀一氏は、荒木氏の『仏教と儒教—中国思想を形成するもの—』（平楽寺書店、1963年）およびこれ以降の諸論考と本書との関連を当時の研究状況も視野に入れながら考察する。

最後に、日本儒教学会2024年度大会において「18世紀の東アジアにおける戴震」と題したシンポジウムが開催されたことを附記しておく。当日は石井剛「百年前の戴震—「科学と人生観」論戦と生誕二百周年記念活動」、種村和史「戴震の詩経研究に見られる宋代詩経解釈学の影響」、金光来「朝鮮実学の心論—戴震との比較を交えて」といった報告が行われた。（尾崎順一郎）

六、近代

愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol.60（東方書店）は、中国現代思想特集である。まず改革開放から現在までの思想動向を座談で概観してから、賀照田「中国の精神・倫理的苦境」、李曉東「「権威」と民主主義との間」、陳純「中国自由主義の苦境とその可能性」、中村元哉「2010年代の憲政論の地平」、緒形康「大陸新儒家の34年」、福嶋亮大「天下主義以降の趙汀陽哲学」、王前「中国における国家主義的思潮の行方」、宋少鵬「「上野千鶴子ブーム」とインターネット時代のマーケットプレイス・フェミニズム」の諸論考を収める。中国の現代思想に関する紹介・分析がまとまった形で示されることは少なく、貴重であるが、「苦境」という言葉が論説の主題・副題に3カ所登場するように、現状と見通しには不透明感が強い。もっともこれは世界的な状況・動向でもあろう。

現代思想について、劉燕子『不死の亡命者 野生的な知の群像』（集広舎）は、1989年の天安門事件により亡命した知識人たちの営為と思想を研究する大著である。中国内外の歴史に遡り、時間的・理論的に包括的な分析枠組みを設定している。亡命とは母国から逃れることのみならず、国内に留まりながら「地下」に生きる、あるいは抵抗する「国内亡命」をも含んでいる。「レイ・チョウ（周蕾）が指摘した「中央集権的」で「中国中心主義」を象徴する〈中（チョン）〉の超越をもたらす」亡命により、「「中国」を超えて普遍性を志向する文化を創生」している（676頁）、と、中国亡命知識人（劉賓雁、方励之、高行健、鄭義、嚴家祺、楊煉、哈金、廖亦武、老木、劉曉波、ツェリン・オーセルなど）の存在意義を見出している。

芸術史分野では二点画期的な大著が登場した。呉孟晋『移ろう前衛 中国から台湾への絵画のモダニズムと日本』（中央公論美術出版）は、モダニズムが表現の「移ろい」

を禁じるものでありながら、モダニズム作家はさまざまな主義・理念に接して作風を変え、国境を越えてきたという「移ろい」に着目し、民国期中国の広東・上海・東京、日中戦争・国共内戦期の上海・重慶・香港・台北、戦後台湾の台北、と時代と場所の推移を追いながら、「書画」から絵画が再定義されて近代的制度の中の「美術」として確立する過程、日本の前衛画壇と中国画学生の関わり、戦時中におけるモダニズム絵画のプロパガンダの役割と葛藤、戦後における「伝統」の取り込みとモダニズムの特色化、といった諸論点を考察する。そこで一貫して参照の軸となるのが、同時代の日本の「前衛」であった。

菅野智明『中国書学と近代知』（汲古書院）は、元来「書画」として一体でありながら、近代において「美術」からしばしば切り離された「書」学の、中国近代における展開に関する研究である。第一部「前近代からの接続」については「近世（明・清）」の項で触れた。第二部「碑学の相対化と変容」では、石刻文から古銅器の銘文、竹簡木牘の肉筆へと碑学が拡充する過程を見る。第三部「書学資料の鑑蔵と複製」では書学資料の組織的鑑定、鑑別指南書、影印出版の登場と影響について考察する。第四部「『美術』の導入と中国美学」では、清末から1930年代初頭までの書・書学の立ち位置を考察する。第五部「中国書学を介した日中交流」では、近代日本の中国書学が本国最新の書学に即応していた点を明らかにする。これら考察を経て、結章では官民・公私を軸とする、中国書学をめぐる近代「知図」によって全体を位置づけ直す。

金正鉉編著、柳生真訳『北東アジア、ニーチェと出会う 19世紀末～20世紀初頭の精神的地平』（法政大学出版局）は、韓国の圓光大学校韓中関係研究院 HK＋北東アジア人文社会研究所の研究企画による論集であり、中国近代については、金賢珠「梁啓超の社会進化論とニーチェ思想」、高建恵「魯迅と沈從文のニーチェ解釈—1920年代の文学經典化とニーチェの中国化を中心に」を収録する。

「尊厳学」に関する共同研究論集として、小島毅・加藤泰史編『尊厳概念の転移』（法政大学出版局）が刊行され、中国（台湾）近現代に関する論考として小島毅「唐君毅の「自作主宰」、中村元哉「張君勱の憲法制定活動からみる「人間の尊厳」の思想的基盤」、牧角悦子「周作人「人間の文学」に見る中国近代知識人の「人間」観」、石井剛「科学と人生観」論争とその綻び」、陳文松「日本統治時代の台湾人の尊厳とは?」、陳建守「戦後台湾における尊厳の概念史」、劉蔚之「教育学者張彭春の思想過程とその「世界人權宣言」に対する影響（1923～1948）」を収めている。（竹元規人）

七、道教・仏教・民間信仰

ここでは、仏教・道教・民間信仰を中心とした中国および周辺諸地域に関わる宗教研究について記す。

仏教については、特に天台宗と禪宗について大きな進展があった。村上明也『章安灌頂の研究』（法藏館）は、伝統的に天台智顗の忠実な筆録者と見做される章安灌頂を取り上げ、智顗説、灌頂記とされた諸典籍から灌頂独自の教学を抽出する。もちろんその成果は、吉蔵思想との交流も含めた初期天台宗思想の形成史に再考を迫るものである。

なお本書でも取り上げられる『法華文句』については、菅野博史訳注『現代語訳 法華文句（上）』（東哲叢書 仏典現代語訳シリーズⅡ、東洋哲学研究所）も出版された。

大津健一『中国天台宗の戒律観の研究 明曠『天台菩薩戒疏』を中心に』（東洋哲学研究所）は、前半は仏教伝来より智顗・灌頂・湛然に至る戒律理解の研究、後半は唐・明曠の『天台菩薩戒疏』についての全面的な研究である。前半では前述村上氏の研究も参照しつつ、智顗と灌頂との差異はさほど大きくないという立場を採る。

土屋太祐『法眼 唐代禅宗の変容と終焉』（臨川書店）は一般向けのシリーズ「唐代の禅僧」の一冊だが、いわゆる法眼宗を中心とした晩唐五代禅思想概説の趣があり、また思想理解について日本での通説をさりげなく訂正するような記述もある。椎名宏雄『宋元版禅籍の文献史的研究』第二巻（臨川書店）は過去の論考や解題の集大成であるが、比較的近年の五山版の解説のほか、黒水城文献『慈覚大師禅師勅化集』や、天順本など朝鮮刊『二入四行論』、天寧寺旧蔵本『壇経』についての報告など、今なお必読の成果である。

小川隆『禅宗語録入門読本 禅の物語で学ぶ漢文の基礎』（禅文化研究所）は、唐五代の禅師にまつわる代表的な問答・逸話を題材に、白話の語法、禅録読解の技法が説き明かされる。また同著者が2008年に刊行した『臨濟録』（岩波書店）が、参考文献に増補を加え『臨濟録のことば 禅の語録を読む』（講談社学術文庫）として再刊された。

吉村誠『『般若心経幽賛』を読む—唯識の修行（新・興福寺仏教文化講座10）』（春秋社）は、『般若心経』の訳者玄奘の高弟・慈恩大師基による注釈書の講読である。なお著者は、本『学会報』第53集（2001年）に「玄奘の事跡にみる唐初期の仏教と国家の交渉」を発表している。同じ玄奘門下の著作に対する訳注として長谷川岳史・小野嶋祥雄・村上明也・吉田慈順編『石山寺蔵 靖邁撰『仏地経論疏』巻一の翻刻と訓読』（法蔵館）が刊行された。本書は石山寺のみに伝存する玄奘門人の当該著作について、解題・訓読・影印・翻刻を提供しており、基礎研究の模範を呈する。光川豊藝著、井上博文・金澤豊編『文殊菩薩の研究』（法蔵館）は、論考のほか文殊菩薩関係經典解題を収録する。

道教について、齋藤龍一『中国道教像研究』（法蔵館）は、道教像の出現と定型化から説き起こし、仏像のように中央の様式が波及するのではなく、地方で生まれた特徴が各地へ波及すること、信徒による像そのものの移動と、制作者の交流による様式の影響関係は異なることなど、重要な指摘が実証的になされる。特に、道教の造像活動は道士の指導によるものではなく、むしろ道士に批判される「雑俗の家」から始まったとの指摘は、思想史の観点からも興味深い。

道教とも密接に関わる民間信仰について、二ノ宮聡『泰山諸神の信仰の展開—東岳大帝から碧霞元君へ』（勉誠社）は、漢代以来の泰山神の歴史、北京および満州における碧霞元君信仰と廟会活動について、文献と現地調査の双方を駆使して論じる。炳靈公信仰や満州の碧霞元君信仰など近年の研究で手薄となっていた題材を取り上げ、また泰山神の変遷を論じる章では、著者も翻訳に参加した『封神演義』など通俗文学も資料としている。二階堂善弘『中国の信仰世界と道教 神・仏・仙人』（吉川弘文館）は、まず

儒仏道三教と民間信仰の区別や「民衆道教」概念の見直しなど、中国人の複雑な信仰世界を整理した上で、彼らの信仰する主な神々や神仙たちを紹介する。その筆は通俗小説や雑劇に見える信仰、東南アジアや日本に伝播した華人の信仰にまで及ぶ。

ほか、鈴木董編『講義 宗教の「戦争」論 不殺生と殺人肯定の論理』（山川出版社）では、小島毅氏、横手裕氏によって儒教、道教の戦争や殺人に関する見解が紹介され、菊地章太『東アジアの信仰と東西交渉』（研文出版）は中国の仏教・道教及びキリスト教に関する論考を収録する。

東アジアにおける非漢民族の宗教について、楊海英『アルジャイ石窟 モンゴル帝国期 草原の道の仏教寺院』（筑摩書房）は、内モンゴル自治区アルブス郷に遺る北魏開鑿の石窟寺院・アルジャイ石窟と関連する寺院の歴史と現状、出土文献などを考察紹介する。巻末附録として、石窟内に同経典にもとづく仏像と傍題が記される「聖救度仏母二十一種礼讃經」の影印が収録される。

朴海仙『植民地朝鮮の予言と民衆宗教』（法藏館）は、まず李氏王朝の滅亡など終末論的な予言を記した『鄭鑑録』の植民地朝鮮における受容、日本側の対応を論じ、本書の予言も基礎に置いた民衆宗教である普天教、金剛大道について、大本教や浄土真宗のような日本の宗教との合同や対立の関係も視野に入れつつ考察する。

歴史学の分野では、昨年に引き続き宗教空間という切り口からする都城・王宮の研究がなされており、網伸也編『東アジア都城と宗教空間』（京都大学学術出版会）では、第四章「新羅の都城と宗教空間」、第五章「古代・中世中国世界の都城と儀礼・祭祀・寺院」、第六章「古代東アジアをめぐる国際情勢と交流」が設けられ、日本・中国・韓国の研究者による諸論考が収録される。こうした国際論文集については、翻訳者の貢献も特筆しておきたい。

当該分野のこの一年は、仏教・道教・民間信仰の各分野から良質な成果が刊行され慶賀すべきことと言える。昨年は通俗文学研究の角度から宗教劇を取り挙げた研究が見られたが、本年は宗教研究者が文学作品を資料とする例が目立つ。また歴史研究と現状報告とを結合した成果が見られるのも、宗教研究の特徴と言える。ただし、第76集の本欄でも述べたように、これらの研究の著者の多くは本学会会員ではない。筆者自身も含め、会員の奮起を期待したい。（齋藤智寛）

八、日本・朝鮮など

当該分野は、中国学からの著作に加え、近接分野からの著作を含めると、豊富なものとなり、近接分野の成果に学ぶところが多い分野であることが分かる。本年は昨年に比して中国学からの著作が増えたように感ずる。なお、紙幅に限りがあるため、触れることができなかった著作があることについて、大方諸賢の御諒解を頂きたい。

陳元賛は明末の杭州で生まれ、1619年に来日し、1671年に名古屋で歿した人物で、尾張藩主徳川義直に招聘され、同藩に仕え、同藩士に作詩、書道、製陶法などを教授した。また陳元賛は、自著『老子経通考』において、林羅山が高く評価した林希逸『老子虞齋口義』を批判し、江戸期の老子思想受容に影響を与えた。李麗『渡来人陳元賛の思

想と生涯—江戸期日本の老子研究—』（知泉書館）は、陳元賛の人物や思想、その著作『老子経通考』を検討し、更に『老子経通考』が日本における老子思想受容へ与えた影響について考察したものである。本書は陳元賛の総合的な研究であり、江戸初期の老子思想受容を知る上で裨益するだろう。

五井蘭洲は、江戸中期の儒者であり、晩年は懷徳堂の助教として教育を担い、中井竹山・履軒兄弟の師として知られている。湯城吉信『五井蘭洲著『承聖篇』翻刻・注釈—江戸時代の儒者による仏教批判—』（汲古書院）は、五井蘭洲が仏教批判を展開した『承聖篇』に翻字、校勘、注釈、解説、訓読を加えたものである。『承聖篇』の漢語等には音訓が施されているところがあり、本書は五井蘭洲の解釈や当時の読みを知り得る資料となる。

古文英『幕末期の〈陽明学〉と明末儒学—修己と天人関係を中心に』（春風社）は、従来の陽明学者を対象とした幕末の儒学思想史研究において、「誠中心の儒学」が〈日本的陽明学〉の特色であると捉えられてきたことに対し、明末の儒学と言う全体的な文脈との関係を踏まえ、学派系統の見方から距離を置くことにより、日本の陽明学についての既存の理解を問い直し、幕末思想史の刷新を迫った内容である。本書は、幕末思想史のみならず、日本近世儒学史・思想史を検討する上で、重要な視座となろう。

水野博太『「支那哲学」の誕生—東京大学と漢学の近代史』（東京大学出版会）は、江戸期における学問と教育の正統且つ中心であった漢学の地位が、明治期に崩れていくという時代の変化の中で、学問分野としての漢学は、どのように受動的に揺さぶられ、主体的に振る舞ったかを、明治期以降に東京帝国大学を中心とするアカデミアでどのような変容を遂げたか、あるいはどの部分が変化しなかったのかについて、思想史的・学問史的な観点から考察したものである。本書は、日本における支那学・中国学の歴史を検討したり、存立意義を考えたりする上で重要であり、傾聴すべき説である。

李亮著、望月暢子訳『中国古星図』（科学出版社東京）は、考古遺物、石刻資料、書物、器物等の中国古星図の他、中国の星官大系の影響を受けた朝鮮半島と日本の星図を補章に配して、約350点のカラー図版を掲載し、中国天文学及び中国古星図の世界を包括的に捉えることを目的とした内容である。

川原秀城『朝鮮朱子学 退溪心学と栗谷道学』（東京大学出版会）は、朝鮮朱子学の成立の経緯とその思想内容について、通時的に論説したものである。本書の言う「朝鮮朱子学」は、固有名詞として捉え、中国朱子学とは異なる発展を遂げた朝鮮独自の知的世界／精神世界を指している。本書の対象時期は朱子学が伝来した高麗朝末期から、壬辰倭乱・丁酉倭乱前後が中心であり、その主要課題は退溪学と栗谷学の成立の経緯と思想内容の解明である。本書は、客観的な視座に立脚し、現存資料に基づく思想史を再構築した巨著であり、朝鮮思想史のみならず、漢字文化圏の思想史を研究する上で必読書であることは言うまでもない。

小島毅『近代日本の陽明学』（講談社、2006年）に「増補」を加え、新たに講談社学術文庫として刊行された。「増補」は既出論考を基にⅠ～Ⅳで構成され、日本が近代西洋文明を本格的に受容・模倣するに際して、儒教思想が果たした役割を複数の人物を取

り上げて論じている。江戸後期から近代の精神史を陽明学の観点から捉えた内容である。

以下、シンポジウムや共同研究の成果論文集等について触れたい。

河野貴美子・杜曉勤編『中日古典学ワークショップ論集—文献・文学・文化—』第一巻（汲古書院）は、早稲田大学及び北京大学で開催された中日古典学ワークショップ（中日古典学交流与融通工作坊）の成果論文集である。「日本語版序言」には、漢字漢文文化圏共通の課題として議論の場を設けることを目的として、中日古典学ワークショップを立ち上げたことが記されている。なお、既に本書の中国語版の杜・河野主編『文献・文学・文化—中日古典学交流与融通工作坊論文集』第一巻（北京大学出版社、2022年）が刊行されている。

水口幹記編『東アジア的世界分析の方法—〈術数文化〉の可能性』（文学通信）は、水口幹記編『前近代東アジアにおける〈術数文化〉』（アジア遊学、勉誠出版、2020年）の続編として位置付けられている。本書は、国際色豊かで多彩な執筆者による術数に関する論考が収められ、術数の研究の現状を理解する上で必読の書であろう。また第三部所収「天文占文献二十三種解題」は平易にまとめられており、当該分野の資料の調査・検索の階梯として有用である。

大形徹・武田時昌・平岡隆二・高井たかね編『東アジア伝統医療文化の多角的考察』（臨川書店）は、京都大学人文科学研究所共同研究班の成果論文集である。文理横断的な視点をもって東アジア伝統医療文化を構造的に把握し、理論的特質や今日の意義、可能性を探ることを目的とした内容である。日本医道や鍼灸医術の日本的な展開、朝鮮半島における医書の伝播等の多彩なテーマの論考が収められている。

王宝平・町泉寿郎編『転換期における東アジア文化交流と漢学』（二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢学研究センター）は、二松学舎大学日本漢学研究センター主催のシンポジウムを基にした論文集である。本書における「転換期」とは、19世紀末～20世紀初頭を指し、漢学が洋学に地歩を譲り、洋学導入による近代化を推進した時期でもある。本書は、このような時期に東アジアにおいて漢学がどのように作用したかをテーマとする論考を収めたものである。

京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター編、矢木毅・永田知之・道坂昭廣『続・漢籍の遙かな旅路—日本への旅路』（京大人文研漢籍セミナー、研文出版）は、朝鮮半島を経由し日本に舶載された漢籍が日本において翻刻され、和刻本が朝鮮、更には中国へと環流していく事象とそれに伴う東アジアの人々の交流等について、具体的な漢籍を題材に平易に論じられている。（高田宗平）

●文 学

はじめに

学界展望（文学）は、2024年1月から2024年12月までに日本国内で公刊された著書・学術論文のうち、著書を中心に展望する。各担当者がその時代に関する専門書を抽